

真宗における他力義について

林 智 康

現在「他力」という語は、一般世間においては大変歪曲された意味で使われている。「他力本願」ではなく「自力本願」でなくては難局をのりきれないとか、「他力優勝」しか可能性がないというような、いわゆる「他力」を「他人の力」、「依存主義」、「無力」の意味で政界やスポーツ界等で使われている。その上「自力本願」という、経論釈に全く意味の無い珍語まで作り出しているのである。なぜこのように「他力」の語は、本来の意味から異った使い方がされるようになったのであろうか。第一に考えられることは、本来仏道実践の上で語る「自力」や「他力」の宗教用語の真意を考えないで、日常生活の上でその字句の表面的な意味を用いてきたことによる。次に第二に、浄土教の流れが易行道↓他力↓浄土門であるとする真宗教判論に対する誤まつた理解から生じたものと思われる。他力は安易な道であり、現世を厭うて浄土に逃避する消極的な教えであると誤解されてきたからであらう。さらに第三に、現代の思想や現代人のものの考え方とのズレにその原因があると思われる。自我中心、実証主義、知性第一主義の現代人にとつては、仏力、本願力、他力の教えを受け入れる素地が稀薄である。以上三点の理由を押さえて、さらに他力の真意を考察してみよう。

『大無量寿経』之宗致、他力真宗之正意（行巻）、「横超者、憶_二

念本願_一離_二自力之心_一、是名_二横超他力_一。斯乃真宗也。」（化巻本）、「横と超はすなわち他力真宗の本意なり」（銘文略）、「その廻心は、日ごろ本願他力真宗をしらざるひと、弥陀の智慧をたまはりて」というように「他力」の語は「真宗」の語と一緒に使われている。従つて真宗の教えにおいて、この他力思想は重要な意味を持つものと思われる。それでは本来の「他力」の意味は何であらうか。

他力とは俗に用いられる「他人の力」の意ではなく、「言_二他力_一者、如来本願力也。」（行巻）と言われるように阿弥陀仏の衆生救済の力用である。この「他力」の語は浄土教においては曇鸞の『論註』に初めてでてくるが、曇鸞はこの語を菩提流支の訳からうける。魏の菩提流支訳出の『入楞伽經』巻九、巻十、『大薩遮尼乾子所問經』巻四、『十地經論』巻一、『大宝積經論』巻一、等の諸經論に「他力」の語がみられる。しかしここで使われる意味は、広く自力行の上に加わる仏・菩薩の加被力や加護であり、真宗の他力義とは異なる。

真宗の他力義は、『大經』の「其仏本願力」、「浄土論」の「観仏本願力」をうけて、曇鸞の『論註』において詳細されている。『論註』の冒頭に、竜樹の『十住毘婆沙論』（易行品）を引いて、菩薩が初地不退の位を得る二通りの道（難易二道判）を出す。そして難行道について五難の相を示し、第五に「唯は自力無_二他力持_一。」と述べる。

これは単に五難の一つとしてではなく、五難を總結する意味で用いられている。それは上の四難をうけて「唯是_二」と述べる言葉からと、次の「易行道者、但以_二信仏因縁願_一生浄土。乘_二仏願力_一便得_二往生彼清浄土_一」と、易行道は仏願力によつて浄土に往生する道であると述べるところから推察される。すなわち竜樹の難易二道判は、難易とも機の所修について語り、行の多少、修行の時節の長短等によ

つて分けられるのであるが、曇鸞においては、自力によつて行うのは難行道であり、他力によつて行うのは易行道である。続いて『論註』巻下の覈求其本釈に、「他利之与三利他談有左右。若自仏而言宜言利他、自衆生而言宜言他利。今將談仏力、是故以利他言言之。当知此意也。凡是生彼淨土及彼菩薩人天所起諸行皆縁阿弥陀如来本願力故。」と他利利他の深義によつて他力義を示している。すなわち他利は衆生が仏に利せられるという意味で、衆生の上において行徒生向仏の見方である。又利他は他の衆生を仏が利する事で、仏力を表わす従仏向生の見方である。さらに三願的証を述べた後、「以斯而推他力為増上縁、得不然乎。当復引例示自力他力相。如人畏三塗故受持禁戒、受持禁戒故能修禪定、以禪定故修習神道、以神通故能遊四天下、如是等名為自力、又如下劣夫跨驢不上從転輪王行、便乘虚空遊四天下、無所鄣導、如是等名為他力。」と自己の力で禁戒を受持し、禪定を修し神通力を修習して四天下に遊ぶの自力といい、これに対して劣夫が転輪王の行に従い、虚空に乗じて四天下に遊ぶことができるのを他力という。この文に続く「愚哉後之學者、聞他力可乘當生信心、勿自局分也。」という言葉は、後の親鸞教学における他力の信に影響するものと思われる。以上のことから『論註』は全体が他力の教で一貫されていると言つても過言ではない。

さて親鸞の著述における「他力」の語を見てみよう。「堅超、堅出（中略）歴劫迂廻之苦提心、自力金剛心、（中略）横出者、正維・定散他力中之自力菩提心也。横超者、斯乃願力廻向之信樂、」（信巻本）、「於此界中入聖得果、名聖道門、云難行道、（中略）則是自力、利他教化地、方便權門之道路也。（中略）於安養淨刹入聖

真宗における他力義について（林）

証果、名淨土門、云易行道。（中略）横出漸教、定散三福、三輩九品、自力仮門也。横超者、憶念本願、離自力之心、是名横超他力也。」（化巻本）、「横超如来誓願他力也 横出他力中之自力、定散諸行」（愚舎鈔巻下）と諸文に見られ、親鸞の他力義は大きく二つに分けられる。一つは難行道聖道門を自力とし、易行道淨土門を他力とする場合、他の一つは淨土門内の要真二門の難行雜修を他力中の自力とし、弘願第十八願を他力とする場合である。この二種の他力中、親鸞が往生の因法について他力と言うのは後者の意である。親鸞が眞仮対弁（弘願眞実と要真二門方便）にいかにか心血を注いだかは、『教行信証』をはじめその著述のいたるところに窺われる。特に晩年の和語の著述において、「他力中の自力」（末灯鈔、三經往生文類）を究明し、他力とは「義なきを義とす」（末灯鈔、正像末和讃、銘文、二種廻向文）、「はからいなき事」（末灯鈔、御消息集）、「自然」（末灯鈔、正像末和讃）であると繰り返し述べている。

他力を単に「他なる力」、「この存在に対してもう一つの彼の存在」と他者的に考えたり、又自力の延長線上や、その究極において求められるものと考えてはならない。それは同質的なものの上に自他の対立をみるにすぎない。この自他の分別（人間の意識）を超えたところに他力が生じるのである。他力は自力心を離れる時、すなわち我々の一切のはからいが無になる時に、我々の主体の上に現前する救済の必然性、絶対性そのものである。「摂取不捨、故名阿弥陀仏、是名他力」（行巻）の文はこれを示す。さらに他力は現実の迷える衆生においては、「他力回向の信心」、「たまわりたる信心」といわれる如く、「他力信」として展開されてくるのである。拙論「教行信証における論註の引用について」（宗学院論集第四五号）参照。